様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６８３９

研究課題名（和文）高度成長期における地域社会高齢化過程の研究

研究課題名（英文）The history of "ageing" regional societies during Post-war rapid economic growth era.

研究代表者
安岡　健一（Yasuoka, Kenichi）

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：２０７０８９２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、これまで研究されてこなかった戦後日本における高齢者の集団的な活動について実証的に検討した。1950年代から60年代にかけて、農村部と都市部をそれぞれ検討し、社会教育活動や女性たちによる自主的なサークル活動など、福祉という枠にとどまらない様々な主体の関与を明らかにした。制度的な福祉が整う以前には高齢者は独自に、自らの「老い」を受け止めるために多様な実践と要求をしている。戦後改革に伴う家族関係の変化と結びつけて、高齢者の存在のあり方を主体に即して研究する基盤を得た。

研究成果の概要（英文）：This study empirically examined the collective activities of elder people in postwar Japan. We examined rural areas and urban areas during the rapid economic growth era; from 1950s to the 1960s and revealed the involvement of various subjects other than welfare organization, such as social education activities and voluntary circle activities by women. Before nation-wide institutional welfare is in place, the elder people independently made various practices and requests for facing its own ageing. This project had succeeded to approach argument about the subjectivity of the elder people.

研究分野：日本近現代史

キーワード：高齢化　社会教育　福祉　女性史　高度成長　老人クラブ

１．研究開始当初の背景

高齢化は、日本社会が直面する喫緊の課題であり、それをめぐる議論を目にしない日はない。「高齢化」や「高齢者」についての学術的研究は 1970 年代以降様々な分野で取り組まれ、その蓄積はいよいよ厚みを増している。国外における研究成果も次々と翻訳され（パット・セイン編『老人の歴史』東洋書林、2009 年等）、国内においても社会学や福祉研究の立場からする現状研究は枚挙にいとまがない。

他方、日本史学の領域でも、古代から近世に至る各時代で着々と業績が発表され、一般向けの成果還元もなされている（例えば柳谷慶子『江戸時代の老いと看取り』山川ブックレット、2011 年）。とりわけ現在につながる「イエ」が普及した近世地域史の重厚な蓄積は、歴史人口学の成果と共に注目に値する。

ところが、人口動態が「少産少死」へと移行し、実際に高齢化が問題となり始めた時代である第二次大戦以後の時代について、近現代史の側からのアプローチ、とくに人びとの社会的実態に着目した研究は極めて乏しいと言わざるを得ない。戦後改革によって明治以来の「家父長制」が解体され、新しい「老い方」に向き合った日本社会の人びとの歴史は、いまだ埋もれた状態にある。

既存の研究は制度史や施設史に偏重しており、福祉の制度に包含されない様々な老いの実態を解明する必要がある。目前の「老い」が課題とされながらも、民主化された戦後社会における人びとの、老いと向き合ってきた豊かな歩みを実証研究を通じて共有されていない、というのが研究を開始する背景であった。

２．研究の目的

そこで、高齢化社会の歴史的形成過程を地域に即して明らかにすることを本研究の目的としたうえで、人びとの暮らしの実態を明らかにすることとした。

本課題では特に、変化の端緒となる戦後の高度経済成長期を主な対象としている。また、高齢化が最初に問題化されたのは、青年層が都市へ移動していった後の農村部であったことから、研究対象地として長野県の農村部を選定した。

なお、研究代表者が研究期間中に異動したことを受け、当初は農村地域社会に限定していた研究対象を、都市部へと拡張した。このことにより、高度成長期における都市の老いと農村の老いを並行して検討できるようになった。

３．研究の方法

全国的な統計調査などが実施されていない時代の高齢者の歴史に迫るため、個別地域における高齢者本人や、高齢者の団体が発行した文献や作成した資料等を一次資料として重点的に取り扱うことが本研究の方法である。

研究代表者は、これまで人の移動についての研究を行い、地域社会に残る行政文書や個人資料に基づく実証的な分析を行ってきた（研究成果として『「他者」たちの農業史』（京都大学学術出版会、2014 年））。本研究でもそこで培った方法を踏まえ、高齢者の残してきたさまざまな形態の記録・文献資料を収集し、分析・総合してゆくという方法をとった。

４．研究成果

研究成果について、以下ではいくつかの項目に分類して述べてゆく。

（1）論点の提示

記述の通り、戦後における高齢者についての研究は多くない。そこで取り組んだのが、今後の論点を析出し、研究の射程を大きく示しておくことである。研究費を活用して 1950～70 年代に関する研究と老いに関連する文献資料を収集・分析し、以下の結論を得た。以下、研究業績【雑誌論文②前半】に基づき、その概要を列記する。

①農村部と都市部の相違点
→農村部は、既存の社会関係が強固に存在している点で老いの形態が大きく異なる。単なる地域差ではなく、農村と都市という大きな区分での検討が必要。「イエ」のあり方を検討する際には、「家長権」の変遷も併せて論じられるべきであろう。

②高度成長期の人の移動
→集団就職、出稼ぎなど高度成長期と人の移動の研究が、青壮年の研究である点から捉え返し、それと同時に存在した移動しない主体である高齢者の分析を行う必要。

③老後とジェンダー
→戦後において「老い」を自分の問題として捉え、行動してきたのは当事者を除けばいずれ介護を担うことになる女性であった。女性たちはその過程で自らがどのように老いていくのかについても様々な議論と実践を行っている。この歴史の掘り起こしの必要。

④生活改善との関係
→論点②と関係するが、近年活発となっている戦後の近代化＝生活改善の結果がどのような形で老い方に影響したのかを検討する必要。

⑤農業構造問題としての高齢者問題
→農業にとっての高齢化問題は、老後の補償が乏しいことに起因する、経営継承の遅延であったとの議論がある。農業者年金制度はその対応策として構想・実現された。様々な業ごとの高齢化問題、とりわけ農業における問題を検討することで、経営の近代化という戦

後農政における大きな課題を新たな視点から分析する必要。

⑥技術・資格・近代化
→一般的なモータリゼーション＝自動車の普及に伴う生活に必要なインフラの変化、より特殊には免許を必要とする農業機械の登場が現場をどのように変化させたのか、技術社会の進展と老いの意味の変化について検討する必要。

（2）老人クラブ研究
1950 年代末から 1960 年代初頭に老人クラブとして日本社会の高齢者の約半数が組織されたことは、社会における画期的な出来事である。なぜ、どのように組織は形成され、何に取り組んでいたのか。
本研究では農村部と都市部について、それぞれ検討した。

①農村部
長野県下伊那郡飯田市の伊賀良地区を対象として、同地区の高齢者の指導的位置にあった市瀬繁氏の日記を読解し、どのような過程で老人クラブが形成されたのかを研究した。先進地域である同県伊那市の事例に学びながら、地域における公民館活動で形成された繋がりを活用しつつ、老人クラブの部落単位、旧町単位、そして市全体の連合会が結成されてゆく経過を明らかにした。
戦前期における地域社会のリーダー層が老いたのちに老人クラブの結成に積極的に活動している具体的事例を得ることができたと言える。
【研究業績　雑誌論文②の後半部を参照】

②都市部
大阪は民生委員制度など社会福祉行政において全国的に見ても先駆的な政策を実施しているが、この地域において戦後の高齢者団体の活動はどのようなものだったのかについて、大阪市老人クラブ連合会の機関紙『大老連』を研究し、その活動について検討した。併せて神戸市老人クラブ連合会の『神戸老連』も研究した。
この結果、寺院の僧侶なども主体としながら、国際交流や地域貢献など様々な取り組みに積極的に活動する高齢者の姿が明らかになった。
高齢者団体の機関誌は保存されない事例が散見されるなか、この両団体は資料を保存しており、貴重な事例であると言える。高齢者の活動に係る資料の保存と整理を呼び掛けることが必要である。
【研究業績　雑誌論文①の後半部を参照】

（3）他の社会的団体との関係
高度成長期の高齢化を検討する際には、当時いまだ社会全体で高齢者への対策が問題とされていない中で取り組まれた先駆的事例の検討が必要となる。
本研究では長野県伊那市の長久寺の住職である小林文成により実践された楽生学園に着目した。長久寺に保存されている楽生学園に関係する資料を閲覧、整理させていただくことで楽生学園をめぐってやり取りされた議論や交流の実態が明らかになった（楽生学園の運営そのものについては資料の限界から未検討である）。
これにより、明らかにできた点として、東京における草の実会との交流がある。天野正子による先行研究で（天野正子、老いへのまなざし、平凡社、2006 年）、戦後初めて老いに本格的に取り組んだ団体として草の実老人問題研究会が言及されてきたが、この団体とほぼ同時期に活動を開始していら楽生学園と両団体が交流し、その経験をもとに地域社会調査を実施していたことを明らかにし、そこから何が、どのように問題化されていたのかを分析した。
老いの当事者として、高齢者と女性たちが地域を隔てて交流し、検討してきたことはその後において各地域においても継承され発展してきた。研究期間終了後は、その後の各地における展開についてフォロー調査として聞き取りなどを実施している。
【研究業績　雑誌論文①の前半部を参照】

以上の研究の結果、都市部と農村部における老いの姿について、資料的な面で地域的限界はあるものの、これまでは共有されていなかった 1950 年代後半から 60 年代初頭の社会的に積極的な活動をおこなう高齢者について、新たな知見を得ることができた。
全国老人クラブ連合会や他の都道府県連合会の状況など様々な今後の研究課題が浮き彫りになったともいえる。研究過程で取り組んだ、各都道府県における老人クラブ初代会長の分析からは、1920 年代以後の地域社会史の成果と接合される必要があること、また当初の高齢者の組織化においては福祉以外でも教育や文化、政治などさまざまな経歴を持つ人物が指導者として活動していたことが分かった。
継続的かつ学際的な研究が必要であることが研究期間を通じてより一層明らかになったと言えるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）
①安岡健一、「老い」に集団で向きあうということ、日本史研究、査読有、667 号、2018 年 3 月、pp.115-137

②安岡健一、高度成長期地域社会における高齢者の研究－課題の提示と老人クラブ形成

期の事例―、農業史研究、査読有、50 号、2016 年 3 月、pp.26-37

〔学会発表〕（計３件）
①安岡健一、「二つの嫌悪」建国大学校アジアディアスポラ研究所・大阪大学グローバル日本研究クラスター、2017 年 12 月 9 日

②安岡健一、「老い」に集団でむきあうということ、日本史研究会大会個別報告、2017 年 10 月 7 日、京都学園大学

③安岡健一、「個」の歴史から地域を見る―「自分史」が問い直すもの」飯田市地域史研究集会、2017 年 7 月 30 日、飯田市役所

〔図書〕（計　1　件）
①安岡健一、無念にふれる、椎野若葉、白石壮一郎編、100 万人のフィールドワーカーシリーズ７　社会問題と出会う、古今書院、2017 年 6 月、pp.180-192

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
安岡　健一　（YASUOKA, Kenichi）
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20708929

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）